

[別紙 1]

京都府が 6 月 23 日に発表した「高浜・大飯発電所発災時の放射性物質の拡散予測について」
<https://www.pref.kyoto.jp/kikikanri/kyotofuspeedi.html>

質問・要望書では、京都府と同様に、セシウム 137 で放出放射能を代表させ、高浜原発 1 基で事故が起きた場合について評価している。数値とその出典等は下記。

- ・ 同時発災といいながら、大飯と高浜で実質的に放射能の重なりは考慮されていないこと
- ・ 高浜の被ばくはそれ自体の放出量で決まり、大飯より被ばく線量が高いこと
風向き「ケース 1」で、高浜原発事故による被ばくが、UPZ で約 $1.5 \mu\text{Sv/h}$ と最大値になっているため（5km 圏内最大値 $1.72 \mu\text{Sv/h}$ から距離の比例計算）

1. 京都府の想定：セシウム 137 が 1 基につき 100TBq 放出

この場合の高浜原発事故でのセシウム 137 の放出率は 0.037%

放出量 ÷ 炉内の内蔵量

$$100\text{TBq} \div 270,000\text{TBq} = 0.037\%$$

(※1) 高浜原発のセシウム 137 の炉内蔵量 270,000 TBq の出典

2. 福島原発事故でのセシウム 137 の放出率は 2.1%

放出量 ÷ 炉内の内蔵量

$$15,000\text{TBq} \div 710,000\text{TBq} = 0.0211 = 2.1\%$$

(※2) 福島第一原発事故でのセシウム 137 の放出量 15,000TBq の出典

(※3) 福島第一原発のセシウム 137 の内蔵量 710,000TBq の出典

3. 100TBq という想定は、福島事故の放出率と比べると、約 60 分の 1

$$2.1 \div 0.037 = 56.8$$

100TBq という想定は、福島事故のセシウム 137 放出率の 1/57

4. 京都府の SPEEDI 結果に単純に当てはめると（SPEEDI の具体的条件設定は不明なため）

京都府の「ケース 1」では、京都府 5km 圏内（舞鶴市）で最大 $1.72 \mu\text{Sv/h}$

距離を比例計算すると京都府 UPZ（5km 圏外）では最大約 $1.5 \mu\text{Sv/h}$

放射能放出率の比（高浜と福島事故）56.8 を当てはめると

$$1.5 \mu\text{Sv/h} \times 56.8 = 85 \mu\text{Sv/h} \text{ となる}$$

避難の基準である $20 \mu\text{Sv/h}$ を超えるため、避難が必要

<出典>

(※1) 高浜原発のセシウム 137 の炉内蔵量 270,000 TBq の出典

「高浜 3 号炉及び 4 号炉重大事故等に対する対策の有効性評価の補足説明（関電）2013.10.24）7.4-5 頁

<https://www.nsr.go.jp/data/000148111.pdf>

(※2) 福島第一原発事故でのセシウム 137 の放出量 15,000TBq の出典

「東京電力株式会社福島第一原子力発電所の事故に係る 1 号機、2 号機及び 3 号機の炉心の状態に関する評価について」（2011.6.6）原子力安全・保安院 通し P.13 表 5（一部）

<https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9450762/www.meti.go.jp/earthquake/nuclear/pdf/20110606-1nisa.pdf>

(※3) 福島第一原発のセシウム 137 の内蔵量 710,000TBq の出典

「福島第一原子力発電所 1 号機 原子炉停止時放射 一原子力発電所 1～3 号機の原子炉停止時の放射性物質（ヨウ素 131、セシウム 137）の量について」（2011.4.14）原子力安全・保安院

<https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9395049/www.meti.go.jp/press/2011/04/20110414004/2011041404-4.pdf>

[別紙 2]

◆2019年1月31日申入れ：

＜京都府の原発事故放射能拡散シミュレーションは、今年度内に終わるが、公表の仕方は未定＞
残りの時間で、京都府の原発事故の放射能拡散シミュレーションの進捗状況などについて質問し
要望しました。回答概要は以下の通り。

今年度に予算が上がっている事業なので、今年度内には結果を出したい。

計算には SPEEDI を使う予定でかなり時間がかかる。国は、SPEEDI は原発事故の避難に際しての
使用はしないことになり、自治体の端末は引き上げられて今はないが、シミュレーション、事前
の予測での使用は妨げないと言っている。

シミュレーションの前提となる条件については、京都府の原子力専門委員たちに、会議ではなく
個別に資料を渡して相談しながら検討している。

シミュレーションは、単位時間当たり単位放出量（1時間あたり1ベクレル）で方向性を出す。
今回は予算が700万円と限られているので、海側に風が流れる場合は省いて、京都府に風が流れ
る気象条件の場合で行う。予算を取って委託計算に出しているのは単位当たりの計算だ。それが
どういう方向へ飛んでいくかという計算をしている。具体的な条件を考えてそれに数量をかけて
算出していくが、福島で放出された量などで行うかなどの条件については相談中だ。

実際の気象条件をあてはめて検証する予定だが、いろいろな方向に風が吹いた場合は、放射能濃
度が薄まるので、ある程度一定方向に風が吹いた場合を考えている。高浜・大飯の同時発災の場
合も含めて検討しており、避難計画に反映させる。

シミュレーションは今年度予算で行い、3月31日までに終わるつもりだが、公表をどのようにし
ていくかは未定だ。

市民からは、福島原発事故並みの放出量でやって欲しいと要望しました。

◆2019年4月10日：

京都府の担当者に電話でシミュレーションの進展状況について尋ねました。

＊ 結果を発表する日はまだ決まっていない。

夏中？と尋ねると、去年の予算でしたので、それより早いですと回答。

しかし5月にはならない感じでした。多分6月頃になる感じです。

＊ 事故想定はまだ決まっていない。

「福島のレベルの事故にするのですか？」と尋ねた所、まだ想定を決めていないと回答。

＊ 行っていることは、11月20日の契約発表に書かれている（以下参照）、「平成23年度に実施
した SPEEDI ネットワークシステムによる放射性物質拡散予測調査（以下「前回業務」という。）
と同様の調査・分析を実施するものである。」

平成23年度に実施した内容と計算条件等の設定は同じ。

＊ 進展状況：

計算は昨年度内に済ませた。中身を現在分析している。

大量放出がどのように放出されるかまだ決めていない。今後どのように事故規模を想定するか
決める。

決まったらこのシミュレーションを使う。

事故の規模によって放射性物質の放出が変わる。

どの規模ならどうなるか、規模を打ち込んで、シミュレーションを使える。

☆発表する段階で規模を言うかどうかまだ決めていない。

どのような形で発表するかまだ決めていない。

◆2019年12月9日：

シミュレーションはまだ公表に至っていない。まだ専門家さんの意見を聞いている。なかなか進
捗に至っていない。少なくとも公開出来るものにまだ至っていない。昨年度に結果は出ている。
つまりシミュレーション事態は終わっている。公表の仕方（について決まっていない）。シミュレ
ーション結果がどういう意味を持つのか、放射能の専門家の意見を仰ぎながら、その作業を進め
ている。